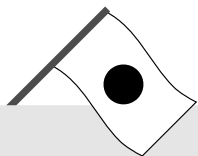


# 正月は“めでたい”

どうしてお正月はおめでたいの？  
お年玉は「年魂<sup>としだま</sup>」ってほんと？





玄関に日の丸を立て、松山一郎さん

(45歳)が居間に戻ると、

「お父さん、お雑煮の用意ができたわ。

お供え、お願いします」

と、新しいエプロン姿の文子さん(40歳)

が声をかけました。

「ああ、分かった」

一郎さんがお雑煮を神仏に供え終わる

のを待って、文子さんは子どもたちに声

をかけます。

「由香、用意ができたわよ。お兄ちゃん

も呼んでね」

「ハイイ！」

鏡餅といっしょに床の間に飾ってあつ

たお屠蘇をもつて来た一郎さんは、食卓

についたみんなに注ぎ終わってから、

「新年明けましておめでとうございま

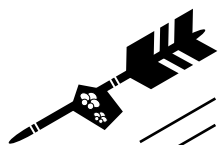
す」

と、あらたまつた口調です。

「おめでとうございます」

と、みんなも声をそろえました。





# 正月は、なぜ〴〵めでたい〴〵か

「いただきます」

お節料理、雑煮を食べながら、

「ねえ、どうして、お正月はおめでたいの？」

と、由香ちゃん（11歳）が、文子さんに尋ねました。

「そうね、お正月は年の一番初めの日だ



からじゃないかしら。ねえ、お父さん」

「うん、たしかにそれもあるね」

「なんで、一番初めの日がおめでたいのさ。勉強やスポーツなら、一番がいいに決まっているけど……」

横から、最近理屈っぽくなってきた隆一君（14歳）が、口を出します。

「そうだな、お正月が、なぜおめでたいのか。以前、お父さんもおじいちゃんから聞いたことがあるんだよ」

一郎さんは、そういつて、次のような話をしました。

# 正月は生命力が新しくなるとき

人間の生活は、一年が繰り返されて一生になります。日本では昔から、一年の間に、いくつかの節目をもうけて、その日に神様をまつつて祈つてきました。その中で最も大事なのが正月です。

正月には、「正月様」という年神（五穀を守る神）が来訪して、人々に年玉（年魂）を授けて生命力を新しくしてくれると考えていました。そのことをほめ、喜び、祝いあうのが正月でした。

寒い冬ごもりの生活から春の初めを感じる時季が「立春」で、生命力の復活するときとして、年の初めとしました。旧暦の正月が立春に近いのは、そのためです。今でも年賀状や店頭などに「新春」「迎春」と書いたり飾つたりするのも、「正月＝春」という印象が残っているか



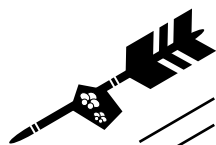
らです。

正月を「めでたい」というのは、正月様が家々を訪れて、世の中が平安で、豊作であり、人々が健やかであるようにと、祝福を授ける時季だからです。それを人々がお互いに、めでたいと述べ合ったのです。

この「めでたい」という言葉は、「愛ず・賞ず」という語から出た「めでたし」で、古くは「愛したい、ほめたい、祝うべきである」という意味を持つていました。ですから、正月に「めでたい」とあいさつを交わすのは、人間同士がお互いに相手をほめたり、祝ったりするの

ではなく、「正月様の祝福に対しておめでたい日だ」という気持ちを言い表したものです。





## なぜ雑煮を食べるの？

「ふーん、なんとなく分かるような気がする。お正月は、みんなにとって特別のときなんだね。だから、『おめでとう』  
と言うのか」と隆一君。

「それじゃあ、お雑煮を食べるのも、特別なときだからなの、お父さん？」と由香ちゃん。

「そうなんだよ。ふだんは食べない特別なものを作って、正月様に供えて感謝するんだね。それが、お節料理なんだ。お節料理を混ぜ煮にしたものが、お雑煮だそうだよ。」

そして、正月様に供えたものと同じものを人間も食べることで、力をつけてもらう、と昔の人は考えたんだね」

「へーえ、昔の人はそんなふうにかけていたのか……。じゃあ、お餅も特別な食べ物なの？」

と隆一君。

「お餅は、今でも、いろいろなお祝いするときにもつくだろう。それと同じで、お正月には、特に正月様に供えるために鏡餅を作るんだね。」

鏡餅は、正月のいろいろなお供えもの



の象徴、つまりまとめたようなものだね。昔の人は、魂は丸いと考えていたの  
で、丸い形にしたらしい。この餅が人々  
に力をつけてくれると思っていたんだ  
よ」

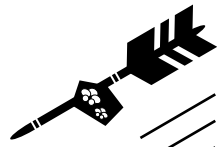
「昔から続いていることには、みんな意  
味があるんだね」

「そうね。今でも〃力そば〃とか〃力う  
どん〃には、お餅が入っているでしょ  
う。これも、年神様から力をつけてもら  
う、という感覚が残っているんじゃない  
かしら」

と文子さん。

「ごちそうさまでした。由香、何だか力  
が出てきたみたい」

「ぼくもだよ。ごちそうさま！」



# お年玉は年魂から

食事を終えて、居間でくつろぎ始めた  
一郎さんに、

「お父さん、もう出してもいいんじゃない？」

と、文子さんが催促しました。

「そうだ、大事なものがあつたな。……」

これは隆一、それに由香」

一郎さんは、のし袋に入った「お年玉」を神棚から降ろしてきて、二人に渡しました。

「やったー。お父さん、ありがとう！」

口をそろえてお礼を言った二人です



が、隆一くんは、まだ何か聞きたいことがありそうです。



「お年玉にも、何か意味があるの？ わざわざお父さんが、神棚から降ろして渡してくれるでしょ」

隆一君に続いて、由香ちゃんも、

「いつもはお母さんがおこづかいをくれるのに、お年玉はお父さんだし……」

「お年玉のことは、昔、お父さんも不思議に思つて調べたことがあるんだよ。だから、隆一にも由香にも、一度調べてみてほしいな」

そう言つて、少しだけ話してくれました。

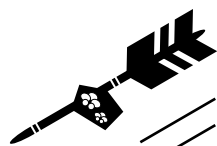
「さつき、おじいちゃんから聞いた『お正月の意味』を話したとき、『正月様の人々に生命力を新しくする年魂としたまを授ける』というのがあつたけれど、覚えているかい？」

「うん、覚えている。そうか、それが、元々のお年玉なんだね」

「そうなんだ。年魂たましいというのは、正月様のくれる魂たましいというか、力というか、それが元だつたんだよ。」

それで、今でも、みかんをカヤという草でしぼつたものとか、お米を紙つみに包んでひねつた『おひねり』とかを、お年魂と言つているところもあるらしいね。だから、おじいちゃんもそうしていたし、お父さんもそれをまねして、神棚にあげておいてから渡すことにしているんだよ」

「それじゃあ、神様に、『ありがとう』とお礼を言わなくちゃ」と言つて、隆一君が、少しいたずらっぽい顔をしました。



# 何のおかげでしょうか

「お父さん、年賀状は届いてる？」

と由香ちゃん。

「そうだ、由香、机の上から年賀状を  
持ってきてくれるかい」

「はい」

由香ちゃんは、一郎さんの部屋から、  
おおいそ大急ぎで年賀状の束たばをかかえて戻ってき  
ました。

「私が分けてあげるね。これはお父さん、  
これはお母さん。はい、お兄ちゃん」

「オッ、中村君から来ている」

「ワー、久美ちゃんからよ」



隆一君と由香ちゃんが、友だちの年賀状に喜んでいきます。

「この年賀状は、お父さんの幼なじみからだよ。『おかげさまで、長男が大学に合格しました』とある。こちらの年賀状は『おかげさまにて家族一同元気にしています』とあるね」

「お母さんにも、勤めていた会社の人か



Ken

ら来ているわ。『昨年中はいろいろとお世話になりました』ですって。何もしてあげてないのに、『お世話になり』とか、『おかげさまで』とか、とても不思議ね」  
「たしかにそうだね……」



## 「おかげさま」は何を意味するか



「そうだ。辞書を引いてみよう」

一郎さんが、本棚から辞書を取り出して調べ始めたのを見て、隆一君も由香

ちゃんも、「何を調べているの?」と近づいてきました。

「うん、おかげさま」という意味を調べ



ているんだよ。あつたよ。……なるほど。

「おかげ」の第一の意味は、「神仏のたすけ」という意味だね。そのあと、「人から受けた恩恵・力ぞえ」とある」

「へえー、そうなの。じゃあ、「おかげさまで」というのは、「神仏のたすけ」に対してお礼を言っているということになるのね」

と言いながら、文子さんは、思い出したように言いました。

「そう、そう。少し前のことだけど、ある大学の公開講座があつて、それに参加したときにこんなお話を聞いたわ、それはね……」

文子さんは、そのときの内容をみんなに話しました。

私たち一人ひとりが、こんにち存在しているということは、動物や植物の生命を摂取する（せつしゅ）という行為（こうゐ）に支えられ、さらにそれらの動植物も、自然界に存在する空気や水で養（やしな）われています。

私たちの命の根源（こんげん）は、自然の恵み（めぐみ）に生かされているといえるでしょう。もちろん、社会とか国とか周りの人々の力（ちから）ぞえもあります。

最も身近なものは、直接に、私たちに生命（いのち）を授け（あづか）した父母（ふぼ）があります。そのずつと昔（むかし）から、それこそ人類（じんるい）の発生（はっせい）のときから命（いのち）をつないできてくれた、先祖（せんぞ）といわれる人（ひと）たちの存在（そんざい）があります。こういう自然（しぜん）のはたらきを、日本人（にっぽんじん）は昔（むかし）から「神（かみ）」

仏（ぶつ）の心（こころ）」というように言（い）っています。

私たちの先人（せんじん）は、こうした自分の周りのいろいろな恩恵（おんゑ）をまとめ、「おかげさまでありがたい」と言（い）ってきただけです。

ですから、特に何も援助（えんじょ）してくれていない人（ひと）にも、「おかげさまで」と年賀状（ねがはじょう）に書（か）くのは、その人（ひと）たちが意識（いしき）していてもいなくても、具体的（ぐたいてき）に現（あらわ）れてこない、目（め）に見えないもの（もの）の援助（えんじょ）に対する感謝（かんしゃ）の気持ち（きもち）と考（かんが）えてよさそうです。



# 私たちは、いろいろな恩恵で 生かされている

「なるほどね。昔の人たちは、自然の生き物や目に見えない神仏を、とても身近に感じていたような気がするな」

「本当ね。ねえ、みんな、これから近くの神社に初詣で行かない？ おかあさんね、何だか〃お正月様〃が、とても身近に感じてきたの」

「行く、行く」

「私も賛成！」

四人は、拜殿の前

で、それぞれにお賽

銭をあげ、ガラガ

ラと鈴を鳴らし

て、手を打ち

ました。

お参りが終



わって帰るとき、文子さんが、

「由香は、何をお願いしたの」

と聞くと、

「ピアノがうまくなりますようにって」

「隆一は？」

「来年は高校受験だから、第一志望の高校に合格しますように、だよ。お父さんは？」

「お父さんは、今日、いろいろ

とお正月のことを話したの

で、珍しく、日本の国

が穏やかで、そして

世界が平和になり

ますように、と

お願いしたよ」

「私は、家族

みんなの健康

をお祈りした

わ

「そうだね。

〃おかげさま〃

で、わが家では今

までのところ、だれ

も大きな病気をしてい

ないから、ありがたいよ。

できれば、毎日が、こんなふうにな〃お

かげさまで、ありがたい〃という気持ち

で過ごせるようになりたいものだと思う

ね

正月の空は、青く澄み、太陽も明るく

照らしています。松山家の人たちが家に

帰り着くまでに、顔見知りの近所の人た

ちや学校の友だちとすれ違い、何度も新

年のあいさつを交わしました。

「松山さん、

おめでとうござ

います！」

「おめでとうござ

います！」

あいさつをした後、

ふと隆一くんと目が

合った一郎さん。

「どうしたの？」

「お父さん、会う人みんなニコニコして

いるよ。やつぱり、みんなお正月様から

力をもらっているんだ。お正月は〃めで

たい〃だね

それを聞いて、松山家のみんなは、う

れしそうにうなずき合いました。

やはり正月は、何となく、いつもと

違った雰囲気ふんいきを漂ただよわせています。

